

博士論文

(要約)

イタリアにおける領域史および風景史の方法論的研究

福村任生

はじめに

本研究が扱うイタリアにおける「風景 *paesaggio*」という研究視角は、一九七〇年代後半以降、「領域 *territorio*」という概念と接合しながら、学際的な関心を集めたテーマである。とりわけ近年わが国の建築学において、「文化的景観」、あるいは「都市史から領域史へ」といった見方が関心を集めており、イタリアにおける領域史および風景史の研究に取り組むことの意義は、ひとつの有益な参照系を提示するということになるだろう。この分野に関してはわが国では都市計画の分野で研究があるが、それらの関心の所在は保存にかかわる都市計画の実践や理論にあり、風景の歴史そのもの、風景の歴史はどのように研究できるのかといったことは、語られてこなかった。このような状況を鑑みて、本研究は二部構成をとり、第一部においてイタリア建築学における風景へのアプローチがどのようにして成立してきたのかという研究史整理を提示し、第二部では、ケーススタディとして個別具体的な風景・領域史研究を実践的に示す。

第一部で扱うイタリアにおける風景史あるいは領域史の研究蓄積は、少なくとも建築学分野に限れば、六十年代に「領域 *territorio*」という言葉を標榜した研究の流れがあり、そののちの七十年代後半より「風景 *paesaggio*」という言葉が流行したというおおまかな流れがある。前者は建築学（とくに都市計画）に閉じた研究展開であったことが特色であり、そのなかで歴史的な視点において最良の成果はS・ムラトーリのグループのものであった。それに対し、後者は地理学、歴史学、環境学と学際的に問題関心を共有したことに特徴がある。両者に違いはあるが、やはり七十年代以降の「風景」研究も六十年代までの「領域」研究の延長線上に位置づくものであり、第二次大戦後から八十年代初頭までの期間が重要となる。そこで「建築」出発点としながら、どのようにして「領域」、「風景」といった概念を包摂するに至ったのかを明らかにすることが課題となる。つまり「建物 *building*」から「空間 *space*」への問題意識の拡張がいかになされたかということであり、そのパラダイムシフトは「類型 *tipo*」概念の洗練と、それとリンクした「(都市) 組織 *tessuto*」概念の成立によってなされたと考えられる。それゆえ、第一部において描き出そうとするものは、「類型学的方法の理論展開」、すなわち「類型」概念を媒介としてイタリアにおける「建築」概念が拡張されていくプロセスとなる。

第一部各章の概略

まず第一章では、四十年代の論考からムラトーリがいかにして「類型」の再定義に至ったのか検証した。ムラトーリは近代建築を批評的に理解する過程において、建築を「構築された有機体」として抽象的に捉えるなかで、まず伝統的テーマであった「様式」の意味を問い直す。そして、戦後の米英独の最新の建築理論を解釈したのちに、空間的な構築物として「類型」の概念を提示するに至ったということが、テキストの綿密な読解を

通して指摘できる。イタリアの戦前の議論があくまで従来の「様式論」や「装飾論」の範疇を抜け出ていなかったことを考慮すると、この小さな前進の意味は無視できないものであった。

つづいて第二章では、イタリアの建築学が大きく動いていく五十年代から六十年代をあつかう。ムラトーリが1959年に発表した『ヴェネツィア都市形成史研究』は、第一章で取り上げた四十年代の「構築された有機体」に関する理論あるいは理念を現実の都市空間の読解に適用させた極めて実験的な試みであったといえる。そのなかで、「建物類型」と相互媒介的に規定される「都市組織」の概念が始めて具体的に示される。しかしながら『ヴェネツィア都市形成史』における歴史叙述は、全てがかならずしも実証的な検証をとまなうものではなく、やや過剰な連続論が結論されたことは今日批判的に受けとけるべきであろう。

「建物類型」、「都市組織」の概念はその後のイタリア建築学の特に都市計画における歴史的都市の分析において有効な方法として認知される。しかし「都市組織」というモチーフは容易にモルフォロジカルな図像に還元されてしまう危うさを併せ持っていたことには注意がいる。ムラトーリのヴェネツィアの都市組織論において決定的な意味を持った、ビザンツ期のコルテ組織の読解は社会経済史の成果に学んだものであり、都市空間を媒介とした人的集合、社会的価値を見出すことにこそ、本来の都市組織論の価値があることを論じた。

第三章では六十年代までの蓄積の上に展開する「領域」研究と「風景」研究について、「文化的景観保存」の先駆的業績をつくったパオラ・ファリーニの研究史整理を頼りにまとめた。ファリーニが七十年代末に取り組んだ風景構造の理論的研究は、端的にいえばムラトーリの類型学的手法を風景の読解に応用したものと理解できる。重要な点はカタストと呼ばれる地籍史料が、歴史的な風景構造の分析に役立つことを具体的に示したことといえ、またムラトーリ学派の領域研究が持ちえなかった農業景観の文化的価値を評価する「風景」論としての視点がそこで提示されたことといえる。

第二部各章の概略

第二部では話題を転じて、北イタリア、ヴェネト地方の小都市アゾロの領域を具体的対象として、建築—都市—風景の歴史的な空間構造について地籍史料と現地での実測調査の成果をまじえた個別具体的な事例研究をおこなう。第一部で確認した方法論に学びながらも現時点で取り組むことが可能な方法論の最前線を探る。

まず第四章では、対象とするヴェネト地方の都市・領域史研究における研究動向を整理し、また対象となるアゾロを理解するうえで必要な前提知識を提供した。わが国をふくめヴェネト地方への建築学分野の関心はやはりヴェネツィアに集中しがちで、地域がもつ多様な風景への関心は比較的近年のものといえる。本研究が対象とするアゾロは、

古代に礎が築かれたことは確かだが、実質的には十世紀頃に再定住された中世の「カストゥルム」を起源とする都市であるとみられることから、中世史学分野の研究成果も踏まえ、風景研究の基礎史料といえる近世後期以降の地籍史料をどのように解釈できるかが、方法論の鍵となる。

第五章は、アゾロの都市空間を対象とし、その都市組織の分析を行った。ここでは六十年代の都市組織論が捨象してきた地形や地盤といった土地そのものの性格と性質も分析の対象となり、尾根と谷からなる複雑な地形からなるアゾロの都市領域の形成過程について中世街区の実測成果と、十八世紀の土地台帳の空間的復元を通して考察をあたえた。

第六章では、五章で扱ったアゾロの都市空間を構成する都市住宅の個別性と類型性を論じた。アゾロの中世の都市住宅はスキエラ型とよばれるものだが、敷地条件も含めて考えると、三つの細分類が可能なことを間口の寸法体系から示した。また中心の街区から離れたボルゴ地区の近世パラッツォの平面と断面に着目し、近世の邸宅建築の特徴として、土地そのものを建物に適応させて改変した例や、既存の中世の建物組織をそのまま利用した近世期のリノヴェーションの例が存在することを明らかにした。以上の分析から、アゾロにおいては類型的モデルが敷地条件に巧みに適応するなかで実現している点に、アゾロの都市住宅の特質を見出せるといえる。

第七章は、都市空間の形成と連動するアゾロの風景の変容を論じた。アゾロの中近世の市民意識は通常の市壁によって規定される市民の観念とことなり、丘の上の小都市とそこからシームレスに丘陵部と平野部にひろがる「ヴィラ・ダゾロ」とよばれる広域の空間が、市民の領域として観念されてきた。十八、十九世紀の地籍史料の悉皆的な復元により、近世末期から近代初頭の農地組織の詳細な観察が可能となり、丘陵部と平野部のアゾロの農村領域の開墾プロセスについての仮説を提示した。その分析において、（１）従来の社会経済史研究で、数値統計的、あるいは図式的にしか語られてこなかった地籍史料が個別具体的な風景の変容を論じるうえでも有益であることを示され、（２）ヴェネトにおける中世のカストゥルム起源の小都市の一例として、アゾロの領域的社会構造の特徴が明らかにされた。

結論

第一部は以下の三点に要約される。まず第一に、歴史的空間を理解するためにムラトーリが提起した類型学的アプローチにおいて、建築的な直観の認識は最重要といえるが、その直観は実証的なアプローチをとまってこそ有益な歴史研究となりうる。第二に都市組織論は本来は空間論として意味をもち、形態論へ陥ることへ注意しながら、空間の実態とそれを形成維持する社会的集団への分析が不可欠といえる。第三に、都市組織へのアプローチを領域研究に応用するうえで重要なことは、領域の実態をなす風景への視点であり、近世近代の地籍史料の復元的分析が有効な風景史および領域史の方法論とな

る。しかしここでも地籍図や土地台帳が何を描き、何を描いてこなかったか、といった史料批判は必要であり、また社会と風景が連動しながら変容していく様相をとらえることが目的となるべきである。

第二部では、個別具体的な分析に集中しながら、ヴェネト地方の辺境領域に成立した小都市における中近世の連続的な変容過程が注視された。空間史としての領域史および風景史の研究方法において近世後期から近代初頭の地籍史料は有効な史料であり、普遍的方法論として提示することを本研究は努めている。今後の展望として、同様の方法論によりヴェネトの辺境領域の小都市研究を進め比較を通して、より豊かな風景史、小都市の歴史研究の可能性を提示してゆきたい。